テオソフィア

THEOSOPHIA

spring

TOPICS

年末年始特集　HPB文集より②
シークレット・ドクトリンII 人間生成論 ⑫
新時代の共同体 1926 ⑦

2026年春号　神智学協会日本ロッジ会報誌　vol.78

神智学協会のお知らせ

●2026 年５月より新年度となります。会員を継続される方は年会費のお手続きをお願いいたします。詳細はメールか別紙にてご案内いたします。
●勉強会はオンラインで行っております。開催の日時などはメールでご案内します。メールアドレスが送信エラーになる方がいらっしゃいますので、勉強会のお知らせなどが届いていない会員の方がおりましたら、info@theosophy.jp までご連絡ください。
●会報誌の発行は年４回となります。発送月は７月、10 月、１月、４月となります。
●アグニヨガシリーズ『モリヤの庭の葉Ⅱ（光明）』『新時代の共同体』が出版されました。Amazon で購入可。
●日本発の「人々の寺院」は勉強会グループを神智学協会内でおこなっております。アグニヨガと合わせて、霊的探求をしましょう。お待ちしております。

書籍のご案内

テオソフィア　春号　vol.78　神智学協会日本ロッジ会報誌

年末年始特集　HPB文集より …… 1
シークレット・ドクトリンⅡ 人間生成論 ⑪ …… 10
新時代の共同体 1926 ⑥ …… 16

年末年始特集　HPB文集より②

H・P・ブラヴァツキー　著　　星野 未来　訳

新年と仮面（つけ鼻）についての考察

［『神智学雑誌』パリ、第２巻第 11 号、1890 年 1 月 21 日、193-98 頁］
［上記フランス語原文の翻訳］

万歳、1890 年！

「新年があなたにとって幸運と幸福に満ちたものでありますように！」
――これは、キリスト教時代より何世紀も前の 1 月 1 日、身分や貧富を問わず、すべての異教徒たちの口にのぼった祝福の言葉であった。そして今日でも、特にパリではこの挨拶が聞かれる。この互いの祝辞は、その日、ローマ帝国の隅々にまで交わされた。カエサルの宮殿にこだまし、奴隷の粗末な小屋を明るくし、コロッセウムの広々とした回廊やカピトリウム、フォルムといったローマの青空の下、あらゆる場所で雲の彼方まで響き渡ったのである。その日、人々は、二つの顔を持つ神ヤヌスに敬意を表し、善意や率直な親しみ、誠実さという「仮面」を、大小さまざまに身につけたのだった。

「新しい年が皆さまに幸福と繁栄をもたらしますように！」――私たちはすべての読者にそう言う。「その年があなたにとって光となりますように」と、私たちは敵や中傷する人々にも願う。そして、世界中の神智学徒の兄弟たちに――兄弟たちよ、せめて今日だけは、それぞれの偽りの仮面を外し合い、互いの健康と成功、そして何よりも、幸いにも過ぎ去った 1889 年よりも、もう少し心からの相互理解が深まることを願おう。

もっとも、こうした古いラテン語の定型句をフランス語や英語でどのように言い換えても、それは結局、古代異教の言葉の一つの変奏 (バリエーション) にすぎない。新年も、他のあらゆる祝祭も、オリンポスの神々を崇拝した人々からキリスト教徒への遺産なのである。どうぞ、願いや贈り物（エトレンヌ）を交わそう。しかし、神智学徒の皆さん、私たちはその由来に感謝を忘れてはならない。これらの習慣が異教から伝わったものであり、祝福や贈り物もまた同じ源から受け継がれてきたことを、忘れないでおこう。

実のところ、贈り物（エトレンヌ）とは、ラテン人たちが新年の幕開けとなる 1 月 1 日 * に交換していたストレナエ、すなわち贈答品に他ならない。誰もが知っているか知らないかは私にはどうでもいいことであるが、この日はヤヌス神に捧げられていた。ヤヌスは 1 月（Januarius ／ January）の語源となった神であり、ナポリとそのラッツァローネ（乞食たち）の守護聖人の名の由来にもなっている。しかし結局のところ、この愛すべき聖人も、二つの顔を持つ神ビフロンスの「仮面」の一つに過ぎない。この古い異教の神は、若い頃にはヴェーダの名にちなみディアウスと呼ばれ、昼と光の美しい神でした。彼はテッサリアに渡り、さらにイタリアへ移住して、テヴェレ川沿いの小さな村ヤニクルムに住みつき、名をラテン語化してディアヌス、すなわち光の神（ここからディアナ〈ダイアナ〉の名も生まれた）となった。彼の「偽りの鼻」（仮面）は数知れず、歴史もそのすべてを記録しきれていない。しかし、その後彼はキリスト教に改宗し、こうして十八世紀以上もの間、より新しく控えめな「仮面」を、より立派で、しかしより不可解な「仮面」と取り替え、今では聖ペテロと呼ばれている。

* Janua（ヤヌア）に由来――「扉」あるいはあらゆる入口、すなわち年の扉を開く日。

読者は、どうか抗議をお控えいただきたい。特に、私たちに侮辱的な言葉を投げかけるのはご遠慮いただきたい。それは私たちを傷つけることはないが、むしろ読者自身の評価を下げてしまうだろう。私は、ウェルギリウスやホラティウス、オウィディウスを学んだ者なら誰もが知る、多少なりとも覆い隠された真実や象徴の、ただ謙虚な解釈者に過ぎない。偽鼻も仮面も、老異教徒が、主を否定した使徒の中に、二面性のあるヤヌスを見出すのを妨げることはできなかった。両者（ヤヌスの二面性）は同一であり、誰もが自分のものを、どこで見つけようと手にする権利がある。聖ペテロが天の門番であるのは、ヤヌスもまたそうであったからに他ならない。太陽の宮殿で毎朝や新年ごとに門の綱を引き、彼らを送り出すときに再び門を閉めていた、あの古き天の門番は、新たな役割においても容易に見分けがつく存在だ。神々も人間も支配する星々にはこう記されている。ヤヌスは片手に天国の鍵、もう一方に鉾（ほこ）を持ち、聖ペテロもまたその後を継いだ。ヤヌスは太陽の門番としての役割を、やがてキリスト＝太陽の住まう楽園の門を守る者に譲ることになっていたのだ。この新たな天の門番は、古き門番のすべての役割と特権を受け継いだが、私たちはそこに何の問題も見出さない。ソロモンは「太陽の下に新しいものは何もない」と言ったが、まさにその通りである。私たちの祖先が、洪水の向こう側でわざわざ私たちのために役割や神々を作り上げてくれたのに、私たちが自分たちの姿に似せて新たなものを発明するのは愚かなことだ。だからこそ、すべては過去のままに残され、この世界で変わったのは名前だけなのだ。

あらゆる宗教儀式において、ヤヌスの名は、常に最初に唱えられた。というのも、異教徒の信者たちの祈りが不死の神々の耳に届くのは、ヤヌスの直接の取り次ぎがあってこそだったからである。このことは、今日でも同じである。もし誰かが、聖ペテロを差し置いて三位一体の神の一人と直接交信しようとすれば、必ずや阻まれるだろう。その祈りは、管理人と口論した末に「年老いた門番め」などと悪口を言いながら、彼の事務所に嘆願書を置いていくようなもので、決して上層部には届かない運命にあるのだ。

実のところ、「ピペレット」と「アナスタシー」* の大軍団は、自分たちをかたどった神であるヤヌス・ビフロンスを守護神として認めるべきだろう。そうして初めて、彼らは年の初めに贈り物を受け取る正当な権利を持つことになるし、偉大な守護神もまた、年の始まりから終わりまでささやかな献上品を受け取ることができるのだ。この幻想の世界ではすべてが相対的だが、それでも天上の門番と地上の門番の間には、やはり程度の差があるべきだろう。贈り物という習慣は、身分の高低を問わず、いつの時代にも存在してきた。皇帝カリグラでさえ、新年の日には宮殿の玄関にとどまり、震えながら差し出される臣下たちのストレーネ（新年の贈り物）を受け取ることをいとわなかった。時には、趣向を変えて臣下自身の首を受け取ることもあったという。イングランドの「処女王」エリザベス一世――「女王ベス」は、亡くなったときに三千着もの宮廷衣装を遺したが、それこそが彼女が最後に受け取った贈り物の数々だった。偉い人も庶民も、今なお同じように振る舞っている。西暦 1890 年、私たちが「神の足台」と呼ぶこの狂った地球の上で。

* ピペレット氏とピペレット夫人は、ウジェーヌ・シューの作品『パリの秘密』(1842 年) に登場するキャラクターで、フランスの門番（ポルティエ)、すなわち管理人の奇妙な習慣や特性を象徴している。「アナスタシー」については特定されていない。――編者注 *

アブラハムとヤコブの神も、他国の神々と同じように、約束や贈り物によって心を動かされ、憐れみを示したのではなかっただろうか。この神も他の神々と同様、人間がするように、奉仕の見返りとして贈り物を受け取ったのではないか。ヤコブ自身も神と取引をし、「あなたが私に与えてくださるすべてのものの十分の一を」贈り物として捧げると約束した。そしてこの善良な族長は、ル

ズ（ベテルの近く）（訳注 1）でこう付け加えた。「もし神が私とともにいて、この道中を守り、食べるパンと着る衣を与えてくださるなら……主は私の神となるでしょう」。こう言いながら、彼は自ら立てた「ベテル」の石の頂上に油を注ぎ、捧げ物（étrenner）（訳注 2）をすることを忘れなかった。これは、簡素ではあるが美しい男根的儀式であった（創世記 28 章 18 節、20-22 節）。

（訳注 1）ベテル（Bethel）は、旧約聖書に登場する地名で、「神の家」を意味します。ヤコブが神の啓示を受けた場所として知られ、もともとは「ルズ」と呼ばれていました（創世記 28 章 19 節）。
（訳注 2）「étrenner」はフランス語で、「初めて使う」「最初に捧げる」といった意味を持つ語である。ここでは、ヤコブが石に油を注いで神に捧げ物をする行為、すなわち「初めての奉献」や「供物を捧げる」ことを指している。日本語では「捧げ物」「奉献」などと訳される。

この感動的な儀式は、インドから直接イスラエル人にもたらされたものである。インドでは今日でも、シヴァ神の象徴であるリンガムが、信者たちによって油や花を捧げる同じ外面的な儀式の対象となっており、これは「破壊の神（粗雑な物質の破壊者）」とヨーギたちの祭りが行われるたびに見られる光景である。

すべては昔と変わらぬままだ。キリスト教国、なかでもフランスでは、新年は二千年前と同じように、威風堂々と訪れる。当時、異教徒たちはイチジクや金箔をまぶしたプルーンを食べ過ぎて消化不良を起こしながら新年を祝ったものだ。プルーンはその後クリスマスツリーへと居場所を移したが、それがヤヌスの神殿から私たちのもとにやってきたという事実を変えることはない。確かに、司祭たちはもはや祭壇で若い白牛を生贄に捧げはしない。その代わりに、同じ白い子羊が供えられるが、それでもなお、その日には彼の栄光のために、毎年、四つ足の獣や鳥たちが大量に屠殺されている。実際、今日では新年の一日だけで、パリのたった一つの通りの貪欲な食欲を満たすために流される血の量は、カエサルの時代にローマの一都市全体を養うのに必要だった量よりもはるかに多い。穏やかな異教徒ユリアヌスは、ガリアの神々がカエサルの命令でローマの神々の偽りの鼻をつけられて変装させられた後、ルテティアで愛する神々を再発見した。そして彼は、ヴィーナスに捧げるために鳩を手なずけることに余暇を費やした。その後に続いた、教会の長子たる凶暴な権力者たちは、彼ら自身を鳩に変えてしまうヴィーナスだけを手なずけたのである。卑屈な歴史は、教会を喜ばせるために、前者（ユリアヌス）を「背教者」と呼び、他の者たちには「大帝」「聖帝」「美帝」といった大仰な称号を与えた。しかし、もしユリアヌスが「背教者」となったのだとすれば、それはおそらく彼が偽りの鼻を忌み嫌ったからだろう。一方、キリスト教の後継者たちは、そんな作り物の鼻なしでは、まともな社会に顔を出すこともできなかった。偽りの鼻は、必要とあれば守護天使となり、時には神にさえなる。これが歴史というものだ。野蛮なガリアの神々がオリンポスやパルナッソスの神々へと姿を変えたその変身劇は、そこで終わりではなかった。今度はこれらのオリンポスの神々が、ヤヌスの後継者である聖ペテロの命令によって、強制的な洗礼という新たな処置を受けることになった。金箔や真鍮、接着剤やセメントの力を借りて、ユリアヌスが愛した神々は、暴力的な死を遂げた後、『黄金伝説』や善良なる教皇グレゴリウスの暦の中で、列聖された聖人の名のもとに再び現れるのである。

世界は海のようなものだ。見た目はしばしば変わるが、本質は変わらない。しかし、文明や偏狭な人々の「偽りの鼻」は、世界を美しく飾るどころか、むしろ新年を迎えるたびに、ますます醜く危険なものにしている。私たちは考え、比較するが、哲学者の目から見れば、古代と現代の新年を比べても、現代の元旦が優れているとは言えない。国立銀行の金庫に積まれた莫大な富は、富める者も貧しい者も、誰一人として幸せにはしない。かつて贈り物として渡されたヤヌスの肖像が刻まれた青銅貨十枚は、今の共和国や女王の肖像が刻まれた金貨十枚よりも価値があった。わずか数セントの価値しかない金箔を貼ったプルーンの籠は、今日の元旦にやりとりされるキャンディの箱よりも、消化不良の原因が少なかった。ちなみに、これらのキャンディはパリだけでも 50 万フラン分にのぼる。その一方で、同じ数の男女が飢えと困窮で命を落としているのだ。読者諸君、心を十五世紀さ

かのぼらせてみよう。西暦 355 年から 360 年の新年の晩餐と、1890 年の同様の晩餐を比べてみたい。テルマエ宮殿――今ではクリュニー館として知られる、あるいはその遺構――に住んでいた、あの善良で思いやり深いユリアヌス帝を思い浮かべてほしい。神々以外の誰よりも愛する兵士たちに囲まれ、彼らからも崇拝されながら食事をするこの偉大な将軍の姿が見えるだろうか。今日は１月１日、彼らはヤヌスの祭日を祝っている。二日後の１月３日には、良き都市ルテティア・パリシオラム（現パリ）の守護神イシスにも同じように敬意を表する。その後、古代エジプトの処女母はジュヌヴィエーヴと名を変え、この聖女で殉教者（テュフォンの？）は、ローマがキリスト教世界に与えた「偽りの鼻」の真の象徴として、パリの守護聖人であり続けている。あの帝国の食卓には、ナイフもフォークも、銀器もセーヴルの磁器も、ナプキンさえも見当たらない。しかし、客人たちが食欲旺盛に口にする肉や他の料理には、公衆衛生局の化学者が顕微鏡で調べる必要などない。彼らのパンやワインには人工物や毒物は混じっていない。ヒ素で野菜に偽りの新鮮さを与えることもなければ、保存食の容器の隅に錆が潜むこともない。すり鉢で砕いた赤レンガが胡椒の代用品となることもない。彼らの砂糖（あるいはその代用品）は、戦車の車輪のタールから抽出されたものではないし、リキュールやコニャックを飲むとき、ぼろ拾いの籠から見つかった警官の古靴から作られた溶液を飲み込むこともない。唇に無邪気な笑みを浮かべて、死体（人間も動物も）の脂や、パリ中の病院で使われたぼろ布から濃縮されたブイヨンをバターの代わりに食べることもなかった。これらすべては現代文化、文明と科学進歩の産物である一方、ユリアヌス帝時代のガリアは野蛮で未開の地にすぎなかった。しかし、彼らが新年に食べていたものは、1890 年の元旦の晩餐でも（医者以外には）安全かつ有益に食べられただろう。

「フォークも銀器もなかった」と人々は言うだろう。「あの野蛮人たちは指で食べていたのだ！」

確かに、彼らにはフォークも、おそらくハンカチも必要なかった。しかしその代わり、私たちが毎日のようにしているように、台所の油で祖先を飲み込んだり、白パンに犬の骨を混ぜて食べたりすることもなかったのだ。（訳注）

（訳注）この部分は、過去の「野蛮」とされた時代よりも、現代（19 世紀）のほうが、実は不自然で不衛生、あるいは精神的に堕落しているという逆説的な批判を、風刺と比喩を使って表現している。

もし選べるとしたら、私たちは 1890 年パリの華やかな新年の晩餐会よりも、千年前ルテティアでの宴を迷わず選ぶだろう。野蛮な趣味の見本だと思うかもしれないが――大多数の人がばかげていて奇妙だと考えるその嗜好、すなわち 4 世紀の自然さの方が、19 世紀の偽りの鼻や何もかもが人工的な世界よりも、私たちにははるかに魅力的なのだ。

H・P・ブラヴァツキー

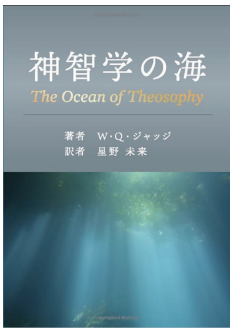
神智学の海

著：W・Q・ジャッジ　訳：星野 未来

電子書籍 Kindle 版 1,000円

POD 版 2,090円

【本書について】
この本は、THE OCEAN OF THEOSOPHY の日本語版です。
アメリカの神智学協会の担い手、W・Q・ジャッジが一般の読者に理解できるように神智学の内容を書いた著書です。この度完訳され、本になりました。



1890 年！　新年の翌日

［ルシファー誌第 5 巻第 29 号 1890 年 1 月 pp.357-364］

未来の顔を覆うベールは、慈悲の手によって織り上げられている。—ブルワー＝リットン

皆さま、新年あけましておめでとうございます！ この言葉を口にするのはたやすく、誰もが新年の挨拶を期待している。しかし、その願いがたとえ誠実な心から発せられたものであっても、ごく一部の人にさえ本当に実現するかどうかは、簡単には判断できない。私たち神智学の教義によれば、すべての人は多かれ少なかれ「磁気的な潜在力」を与えられており、それが誠実で、特に強く不屈の意志によって支えられるとき、自然が人間に授けた最も強力な魔法の梃子（てこ）となり、幸福にも不幸にも大きな影響を及ぼす。それゆえ、神智学徒である私たちは、この意志の力を使って、太陽の下に生きるすべての存在——敵や執拗に中傷する人々さえも含めて——に、心からの新年の挨拶と幸運を送ろう。特に、誠実であろうと不誠実であろうと、敵や迫害する者たちに対しては、いつも以上に親切と寛容の心を持つよう努めよう。そうでなければ、知らず知らずのうちに祝福ではなく「邪眼」を送ってしまうことにもなりかねない。こうした悪い影響は、去りゆく年と新たな年の「8」と「9」という神秘的な数字の組み合わせの力を借りずとも、あまりにも容易に生じてしまう。しかし、この二つの数字が私たちの目の前にある今、悪意ある願いを抱けば、それはまさに破滅を招くことになるだろう！

「おいおい！」と、何人かの何気なく読んでいる読者が叫ぶのが聞こえる。「また神智学の連中の新たな迷信か。聞かせてくれ……」

では、親愛なる批評家の皆さん、お聞かせしよう。もっとも、これは新しい迷信ではなく、実は非常に古いものなのだ。かつては、すべての皇帝（カエサル）や世界の支配者たちがこの迷信を共有し、固く信じていた。彼らは 8 という数字を恐れた。なぜなら、それが万人の平等を意味すると考えたからである。永遠の統一と神秘的な数字「7」、天界と七つの惑星、さらには恒星の領域から、算術哲学において「オグドアド（八元数）」が生まれた。それは偶数の最初の立方体であり、このため神聖視されたのである。* 東洋哲学において 8 という数字は、天における単位の平等、秩序、対称性を象徴するが、自然の掟に反逆する「利己心」によって、地上では不平等と混乱へと変わってしまうのだ。

＊フリーメイソンでありオカルティストでもあったラゴンの説明によれば、グノーシス主義のオグドアドは 8 つの星を持ち、サモトラケの 8 人のカビリ、エジプト人やフェニキア人の 8 つの原理、クセノクラテスの 8 柱の神々、そして立方体の石の 8 つの角（八角形）を象徴していた。[『オカルト的フリーメイソンリー』p.435 脚注]

「数字の 8、あるいは∞は、宇宙の永遠かつ規則的な運動を示している」とラゴンは述べている。しかし、この数字が宇宙的な数として完璧である一方で、それは同時に人間の動物的本性、すなわち低次の自己の象徴でもある。したがって、現在の年号の組み合わせから、人類の利他的な側面にとっては不吉な兆しが読み取れる。というのも、1890 年の中心となる数字「89」は、1889 年の末尾に現れた二つの数字が繰り返されているに過ぎないからだ。そして「9」という数字は、古代人にとって非常に恐れられていた。彼らにとって 9 は、宇宙的・社会的な大変革や、多様性（versatility、可転性、変わりやすさ）の象徴であり、同時に人間の営みの儚さを示す悲しい印でもあった。数字の 9 は、邪悪な原理の影響下にある地（地上、この世）を表し、さらにカバリストたちは、それが生殖や生成の行為も象徴していると考えていた。つまり、1890 年は、その「親」である 1889 年のあらゆる悪を再生産し、さらに自ら新たな悪を生み出す準備をしているのである。三の三倍、すなわち「9」は、ピタゴラスによれば、霊の物質化、つまり粗雑な物質への転化を示す偉大な象徴である。†

† この理由は、ピタゴラス派によれば、私たちの身体を構成する三つの元素のそれぞれが三重性（トリニティ）を持っているからである。すなわち、水は地と火を含み、地は水性および火性の微粒子を含み、火は水の小球と地

の微粒子によって和らげられ、それらが火の糧となっている。したがって、物質には「九重の包み（nonagous envelope)」という名が与えられているのである。

あらゆる物質的な広がりや円弧は、すべて数字の 9 で表されていた。というのも、古代の哲学者たちは、現代の哲学小僧たちが見落とすか、あるいはまったく重要視しない事実に気づいていたからである。しかしながら、この数字 (digit) と数 (number) に内在する本質的な堕落性は、実に恐ろしいものだ。9 は天球に捧げられた神聖な数字として、円周の象徴とされている。なぜなら、その角度の値（度数 360°）は 9、すなわち 3+6+0 に等しいからである。したがって、それは人間の頭部――とりわけ、実際は 3 にも満たないのに 9 であるかのように見せびらかしたがる、現代の平均的な頭部――の象徴ともなっている。さらに、この祝福された 9 は、どんな掛け算においても望むと望まざるとにかかわらず、常に自らを完全に再現するという奇妙な力を持っている。つまり、自分自身や他の数字とかけ合わせても、この厚かましく有害な数字は、必ず合計が 9 になるのだ（必ず各位の数字を足すと 9 になる)。これは、ほんのわずかな刺激で自らを再生する物質界の悪質な仕掛け（ トリック ）でもある。だからこそ、古代人が 9 を物質の象徴とし、そして私たち現代のオカルティストが、9 を我々の時代――すなわち、幸いにも今や衰退しつつある致命的な 19 世紀――の唯物論の象徴とする理由が理解できるのである。

＊＊＊＊＊＊＊

もしこの太古の叡智が、現代の科学者や数学者たちの頭部という「球体」の「円周（境界)」を貫くことができないのなら、一体何がそれを貫くことができるのか、私たちには分からない。1890 年の秘められた未来は、1889 年という外面的な過去と、その前の先祖伝来の 8 年間の中に隠されている。

不幸にも――あるいは、むしろ幸いなことに――この暗い時代において、人類は集団として「先見の明」という能力を欠いている。平均的なビジネスマン、放蕩者、唯物論者、偏狭な者――誰を秘教的な観点から見ても、結果は同じである。日々の目先のことに気を取られざるを得ないビジネスマンは、老後という冬に備えて蓄えを作ることで、ただ賢明な蟻の真似をしているに過ぎない。一方、運やカルマの幻想に選ばれた者は、絶え間ない羽音と夏の歌を響かせるキリギリスになろうと懸命だ。前者の利己的な心配も、後者の無謀さも、どちらも人類に対する重大な義務を無視させ、しばしばその義務の存在すら知らずにいる。特に唯物論者と偏狭な者について言えば、隣人への義務や慈善の心は家庭の中だけで始まり、家庭の中だけで終わってしまう。多くの人は自分と同じ考え方を持つ者しか愛さず、人類や世界の未来など気にも留めない。死後の世界についても、できることなら考えたくないのが本音だ。それぞれの精神的な気質によって、人は死が自分を黄金の門をくぐる慣習的な天国へ、あるいは硫黄の洞窟を抜けたアスベストの地獄へ、あるいは無の深淵の縁へと導くと期待している。そして見よ、唯物論者を除くすべての人が、どれほど死を恐れていることか！ この恐れこそが、ある人々が神智学や形而上学を嫌う根底にあるのではないだろうか。しかし、この世紀――自ら狂ったように大きく開いた墓穴へと渦を巻きながら進むこの時代――において、我々の誰一人として見逃されないあの厳粛な訪問者（＝死）のことや未来について、ほんの一時的に思いを巡らす以上の時間も意欲も持っていないのである。

おそらく、後者については彼らが正しいのだろう。未来は現在の中にあり、そして両方とも過去を含んでいる。ロヘルは稀有な秘教的洞察をもって、「未来は前方から私たちに向かってやって来るのではなく、背後から私たちの頭上を流れ上がってくるのだ」と述べたが、これは極めて真実な指摘である。オカルティストや一般的な神智学徒にとって、未来と過去は人生のあらゆる瞬間、すなわち永遠の現在の中に含まれている。過去とは、狂ったように激しく流れ去る奔流であり、私たちは一瞬の隙もなく、絶え間なくそれに直面している。その一波一滴が、大小を問わず一つの出来事である。しかし、私たちがそれに向き合った途端、それが喜びであれ悲しみであれ、私たちを高めようと打ちのめそうと、すぐに背後へと運び去られ、やがて忘却という大海に消えていくのだ。

私たち次第で、そうした出来事を記憶から消し去り、自分にとって存在しなかったものにすることもできる。あるいは過去の悲しみからプロメテウスの鷲――「暗い翼を持つ鳥、過去の記憶が具現化したもの」を生み出すこともできる。サラの鮮やかな想像によれば、それらは「レーテー（訳注）の湖の上を旋回し、悲鳴を上げる」のだ。前者（＝「そうした出来事を記憶から消し去り、自らにとって存在しないものにすること」）の場合、私たちは真の哲学者である。後者（＝「過去の悲しみからプロメテウスの鷲を生み出すこと」つまり、過去の悲しみや苦しみをいつまでも引きずり、それが心の中で苦しみの象徴（プロメテウスの鷲）となって自分を苦しめ続ける生き方）の場合は、人生という大いなる戦いにおいて「カルマ王」に率いられる人類という軍隊の、臆病で卑怯（ひきょう）な兵士に過ぎない。死を優しく慈悲深い母と見なす戦士たちは幸いである。死は病める子らを冷たく柔らかな胸に抱いて甘い眠りに誘い、そしてすぐに、あらゆる苦しみが癒され、幸福に満ちて目覚めさせる。一つ一つの苦しいため息や涙に、十倍もの報いが与えられるのだ。死後における、最も小さな悪までも完全に忘却されること――これこそが、私たちが信じる「楽園」の最も至福の特徴である。そう、痛みや悲しみの忘却、そしてこの世の劇における幸せな瞬間だけが鮮明に思い出され、いや、再び生き直すことができるのだ。もしも人生に一度もそのような瞬間がなかったなら、かつて抱いた正当で正しく、しかし満たされなかったあらゆる願いが、人生そのもののように真実に、そして七十七倍にも増幅されて、輝かしく実現するのである……。

（訳注）レーテーまたはレテ（Lethe, 古代ギリシャ語：Λήθη, Lēthē）は、古代ギリシア語で「忘却」あるいは「隠匿」を意味する。

ギリシア神話でのレーテーは、黄泉の国にいくつかある川の 1 つである。川の水を飲んだ者は、完璧な忘却を体験することになる。

＊＊＊＊＊＊＊

キリスト教徒、特に大陸の者たちは、新年を特別な華やかさで祝う。その日は子供や召使いたちにとっての「天国（デーヴァチャン）」であり、王や女王から門番や台所の女中に至るまで、誰もが幸せであるべき日とされている。この祭りは、もちろん純粋な異教のものであり、ほんのわずかな例外を除けば、私たちのほとんどの聖なる日も同様である。古き良き異教の習慣は、プロテスタントのイギリスでさえもまだ消えていない。もっともここイギリスでは新年はもはや神聖な日ではなくなってしまった――それは実に残念なことだ。

贈り物は、古代ローマでは「ストレーネ（strenae）」と呼ばれ（今のフランス語では「エトレンヌ（étrennes）」）、今でも人々の間で交換されている。人々は昔ながらに「Annum（アンヌム・）novum（ノヴム・）faustum（ファウストゥム・）felicemque（フェリケム・）tibi（ティビ）（新年が幸多く幸福でありますように）」と挨拶を交わす。確かに、今では役人たちがヤヌス神に白い雄牛を捧げることはない。しかし、役人も聖職者も、皆がクリスマスや新年の晩餐で、白鳥や雄牛を偲んで、肥えた牛や七面鳥を食べることで、かつての祭りを思い起こしているのである。金箔を施したナツメヤシや、干しプラム、干しイチジクは、かつては護民官たちの手からカピトリウムの丘へと運ばれたが、今では子供たちのクリスマスツリーへと姿を変えている。現代のカリグラ（＝権力者）が、かつてのようにヤヌスの頭が刻まれた銅貨の山を受け取らなくなったのは、今や貨幣には神の代わりに自分（カリグラ）自身の肖像が刻まれており、銅貨が王族の手によって触れられることもなくなったからである。また、イギリスでも君主にストレーネを献上する慣習が廃止されてから、まだそれほど長い時間が経っていない。ディズレーリは『文学の珍事』の中で、エリザベス女王の死後、衣装部屋から三千着ものガウンが見つかったと記しているが、これは公爵からごみ収集人に至るまで、忠実な臣民たちに課せられた新年税の成果だった。古代ローマでは、この日に何かがうまくいくと一年を通して吉兆とされていたが、この信仰はいまも多くのキリスト教国、特にロシアで根強く残っている。新年ではなくクリスマスにヤドリギやヒイラギが使われるようになったことで、この象徴はキリスト教のものにされたのだろうか？ 新年の日に聖なる樫の木からヤドリ

ギを切り取る習慣は、異教時代のブリタニアのドルイド僧の遺物である。キリスト教化された今も、ブリタニア（イギリス）は昔と変わらず異教的な風習を色濃く残している。

しかし、イングランドがキリスト教の祭日の中に新年を聖なる日として必ず含める理由は一つではない。1 月 1 日はクリスマスから 8 日目にあたり、世俗史・教会史のいずれにもキリストの割礼の祭日として記されており、その 6 日後には公現祭が祝われる。そして、ゾロアスター教の三賢者の来訪やキリストの割礼、あるいは誕生よりもはるか以前から、1 月 1 日はローマ暦の新年の初日であり、2000 年前から今と同じように祝われてきたことは、否定しようのない世界的な事実である。キリスト教世界がユダヤ教の聖書と、そこに付随する独特な年代記を都合よく取り入れてきたにもかかわらず、異教の新年ではなくユダヤ教のロシュ・ハシャナ（年の初め）を採用しなかった理由は理解しがたい。創世記第 1 章がどの国でも「紀元前 4004 年」と見出しを付けて始まる以上、一貫性の観点からも、異教のローマ暦よりタルムード暦を優先すべきだったはずだ。すべてが教会にそうするよう促していたように思われる。啓示という疑いようのない権威に基づき、ラビの伝承は、イスラエルの神が世界を創造したのはティシュリ月の 1 日、すなわち今から 5848 年前だと断言している。さらにもう一つの歴史的事実として、私たちの祖アダムもまた、そのティシュリ月の同じ日の 1 周年、つまり 1 年後に創造されたという。これらはすべて極めて重要で示唆に富み、私たち西洋人の「恩知らず」を如実に浮き彫りにしている。さらに言えば、これは危険ですらある。なぜなら、そのティシュリ月の1日は「ヨム・ハ・ディン」、すなわち「審判の日」とも呼ばれているからだ。ユダヤ教のエル・シャダイ、すなわち全能の神は、キリスト教の「父」よりもはるかに活動的である。キリスト教の「父」は宇宙の終焉後、「大いなる日」にのみ私たちに裁きを下す。山羊と羊がそれぞれ定められた側に立ち、永遠の至福か破滅かを待つ。しかしラビたちによれば、エル・シャダイは世界創造の記念日、すなわち毎年の新年に裁きの座に着く。大天使たちに囲まれた慈悲深い神は、天体の分刻みの記録帳を開かせ、そこに記されたすべての男女と子どもの名前を読み上げさせる。その記録には、あらゆる人間（あるいはユダヤ人だけだろうか？）の最も細かな思いや行いまでもが記されている。善行が悪行を上回った者は、その年を生き延びることができる。しかし主は、その者のためにキリスト教徒のファラオ（権力者）を災いで苦しめる一方で、結局その善行者をファラオに引き渡し、好きなように搾取させる。しかし悪行が善行を上回れば、その罪人はたちまちその年のうちに死の宣告を受け、シェオル（冥界）へ送られるのである。

これは、ユダヤ人が命という贈り物を実にかけがえのないものと考えていることを示している。キリスト教徒もユダヤ人と同じくらい自分の命を大切にしており、どちらも死が近づくと大抵は恐怖で気が狂いそうになる。なぜそうなるのかは、いまだ明らかにされていない。実のところ、これは創造主に対するあまりにも貧しい賛辞のように思える。というのも、キリスト教徒の誰一人として「父」の言葉では言い表せない栄光と直接対面することを、特に望んでいないかのような印象を与えるからだ。なんとも愛らしい子供たちではないか！

ある日、敬虔なローマ・カトリック教徒が、「決してそんなことはありません」と言い、キリスト教徒が死を恐れるのは、神の栄光と対面することを望んでいないからではなく、むしろ畏敬の念から来るものだと説明した。さらに彼は、聖なる異端審問が「異端者」を火あぶりにしたのは、純粋なキリスト教的慈愛によるものだと聴衆を説得しようとした。彼によれば、こうして彼らは地上で悪事を働くことから遠ざけられたのだという。母なる教会はよく知っていた――生きている間はどんな人間の権威よりも、焼かれた犠牲者たちを父なる神がより良く世話してくださることを。これは状況に対する誤った見方かもしれないが、それでも、すべてキリスト教的な慈愛の心から出たものだった。

私たちは、異端者や教会が排除しようと決めた者たちを火刑に処した本当の理由について、より冷酷な説を耳にしたことがある。その説と比べれば、カルヴァン主義の「永遠の至福か永遠の破滅か」という予定説も、ずいぶん穏やかに思えるほどだ。バチカンの秘密記録には、すべての骨を細かく砕き、肉体の最後の一片まで焼き尽くすことには、あらかじめ定められた目的があったと記

されているという。その目的とは、「教会の敵」が、神学的に構想された世界の劇の最終幕――すなわち大審判の日の「死者の復活」――においてさえ、自らの役割や分け前を得ることを防ぐためだった。教会が今日に至るまで火葬に反対しているのも、同じ理由による。つまり、火葬された「眠れる者」は、天使のラッパの響きで目覚めても、散らばった手足を時間内に集めることができない、というのである。この理由によれば、異端審問の火刑も十分に合理的であり、もっともらしく思える。海はその中にいる死者を返し、死と地獄もまたその死者を返すだろう（黙示録 20 章 13 節参照）が、地上の火は同じような寛大さを持つとは考えられず、正統派が語る地獄の火のような不滅性もない。肉体が火葬されれば、最後の復活に関しては消滅したも同然なのだ。もし異端審問の火刑に秘められたこの理由が事実であるなら――そして、その権威を考えれば私は少しも疑わない――聖なる異端審問や教皇たちは、プロテスタントの予定説に対してほとんど反論できなくなるだろう。なぜなら、後者は黙示録に記されている通り、地獄が最後の時に「呪われし者」を解放し、彼らにも赦しの可能性を残しているからだ。一方、もし自然界の出来事がローマ神学の定める通りに進むなら、哀れな「異端者」たちは「呪われし者」よりもはるかに悲惨な運命に置かれることになる。さて、当然の疑問が生じる――カルヴァン派の神と、火刑を最初に考案したイエズス会の神と、どちらがより洗練された悪魔的な残酷さで他を上回るのか。この問いは、1790 年と同じく 1890 年になっても、いまだ決着を見ていないのだろうか。

＊＊＊＊＊＊＊

しかし、火刑台や拷問台、そして悪魔のような拷問を伴った異端審問は、今では幸いにも廃止された。スペインでさえ廃止されたのだ。もしそうでなければ、この文章が書かれることもなかっただろうし、私たちの協会も、かつてトルケマダが君臨し、人を焼く祭りが行われていた地に、今のように熱心で善良な神智学徒を持つこともなかっただろう。彼らにも、そして広大な地球上に散らばるすべての兄弟たちも、新年おめでとう。ただ、私たち神智学徒――「七つの狂人」という愛称で親しまれている――だけは、新年を別の日に祝いたいと思う。背教者とされた皇帝のように、私たちの多くはいまだにオリンポスの詩的で輝かしい神々への強い愛着を残しており、二面性をもつテッサロニケの神を喜んで拒絶するだろう。一月一日は、常にユノ（ジュノー）よりもヤヌスにとって神聖な日であったし、「年の扉」を意味するヤヌアは、一月のどの日にも同様に当てはまる言葉である。たとえば、一月三日は知恵の女神ミネルヴァ＝アテナと、「生命を生み出す者」イシス――古き良き都ルテティアの守護女神――に捧げられていた。その後、母なるイシスはローマの信仰と文明の犠牲となり、ルテティアもまた同じ運命をたどった。両者はユリウス暦（異教徒ユリウス・カエサルの遺産で、キリスト教世界が 13 世紀まで用いていた暦）によって改宗させられた。イシスはジュヌヴィエーヴの名で洗礼を受け、聖人であり殉教者とされ、ルテティアはパリと改名された。古き守護聖女はそのままに、しかし偽の鼻が付け加えられたのだ *。人生そのものが陰鬱な仮面舞踏会であり、そこでは恐ろしい死の舞踏が刻一刻と繰り広げられている。ならば、暦や宗教さえも、この茶番劇に加わることが許されない理由があるだろうか。

* この祭りは、ルテティア＝パリの女性守護聖人の祭りとして今なお続いており、今日に至るまでイシスはパリおよびラテン系のすべての教会で宗教的な栄誉を受けている。

要するに、神智学徒、特に秘教主義者（エソテリシスト）が新年として選ぶべき日は 1 月 4 日である。1 月は山羊座の支配下にあり、これはヒンドゥーの神秘家たちにとって神秘的なマカラ（訳注：魚とワニや象の合体）、すなわち「クマラ」が黄道十二宮の第 10 のサインのもとで人類に転生したとされる星座である。古くから 1 月 4 日は水星神ブッダ *、あるいはトート＝ヘルメスにとって神聖な日とされてきた。このように、さまざまな要素が重なり合い、古代の叡智を学ぶ者たちにとって、この日は祝祭の日となるのだ。アーリア語でブッダまたはブディと呼ばれようと、天界の父カエルスとヘカテの子で

あるメルクリオス、あるいは神聖（白）魔術と冥界（黒）魔術の神（ギリシャ名）、またはヘルメスやトート（ギリシャ・エジプト名）と呼ばれようと、この日は、二面性を持つ「時の神」ヤヌスの日である 1 月 1 日よりも、私たちにとってはるかにふさわしい日のように思える。しかしながら、1 月 1 日という日付がその名にふさわしく、世界中の政治的日和見主義者たちによって祝われるように選ばれたのも、またもっともなことである。

* 1 月 4 日は水星（メルクリウス）に捧げられた聖なる日であり、ギリシャ人はこれをヘルメスと呼んだ。ローマ・カトリック教会は聖ヘルメスを暦に加えている。同様に、この月の 9 日は異教徒によって「征服する太陽」の日として祝われてきたが、ローマ・カトリック教会はこの名詞を固有名詞に変え、聖ニカノール（ギリシャ語の nikao＝征服する）とし、1 月 10 日に彼を称えている。

哀れなヤヌスよ！ 12 月 31 日の真夜中、最後の鐘が鳴り終わったとき、その二つの顔がどれほど困惑した表情を浮かべていただろうか！ 私たちには、あの古めかしい顔が見える気がする。一方の顔は、過去を惜しむように向けられ、その視線の先では、1889 年という年の亡骸（なきがら）が、急速に濃くなる霧の中に消えようとしている。神の悲しげな目は、去りゆく年に刻まれた主な出来事を名残惜しそうに追っている――崩れゆくエッフェル塔、「単調」と評された（マーク・トウェインの「十頭目のラバ」のように）パーネル＝ピゴット事件の崩壊、王族たちの様々な退位・廃位・自殺、貴族階級のムハンマドたちの流浪、そして文明の奇妙な出来事や大失敗の数々。これが過去を見つめるヤヌスの顔だ。もう一方の顔、未来を見つめる顔は、探究心に満ちて反対方向へ向き、未来という名の胎内の奥深くを見据えている。大きく見開かれたその目の絶望的な空虚さは、神ですら未来を知らないことを物語っている。いや、二つの顔も、時に四つの頭と八つの目を持つヤヌスですら、新年が誕生の瞬間から宿しているカルマの神秘を包む厚いヴェールを見通すことはできないのだ。1890 年よ、運命の年よ、お前は世界に何をもたらすのか――その数字は単位とゼロの間、象徴的には、悪意に満ちた人間と物質宇宙の間に立つものとして *。お前はすでに「インフルエンザ」を懐に忍ばせている、それが顔を覗かせているのを人々は見ているのだ。ロンドンの街では、新たな「照明ブーム」の電線につまずいて命を落とす人々の姿を、アメリカからのニュースを通じて私たちはすでに予感している。ヤヌスよ、二つの年を隔てる欄干に「シスター・アン」のように腰掛けて、お前は小さなダビデが巨人ゴリアテを倒すのを、あるいは小国ポルトガルが大英帝国、少なくともその威信をアフリカの灼熱地帯の地平線上で打ち倒すのを見ているのか？ それとも、ヒンドゥー教徒のルドラが天の帝国から来た仏僧に助けられて、お前に眉をひそめさせているのか？ 彼らは、英国国教会の聖職者の三分の二を、青きクリシュナや、キャベツのような蓮の上に座り穏やかに微笑む象耳の仏陀の崇拝へと改宗させに来るのだろうか？ これらは神智学の理想――いや、神智学そのもの、すなわち神聖なる叡智が、平均的な英国人の極端に物質主義的で何でも擬人化する精神によって歪められた姿なのだ。1890 年よ、お前は世界の目の前に、いかなる言葉に尽くせぬ新たな恐怖をさらけ出すつもりなのか？ たとえ鉄壁のように人生のあらゆる悲劇を嘲笑う年であっても、右手に鍵を持つことから「門番（ヤヌス）」と呼ばれるヤヌスが――聖ペテロとなる遥か以前から天国の門を守ってきた――その鍵を使うとき、お前

『神智学の鍵』

著：H・P・ブラヴァツキー
訳：田中 恵美子

電子書籍 Kindle 版
定価 1000 円

【本書について】
本書は、H・P・ブラヴァツキーによって1889年に出版されました。それは、大著『シークレット・ドクトリン』の翌年のことであり、たいへん難しい神智学の内容を入門者向けに解説することと、当時様々な批判にさらされていた神智学協会と彼女自身の風評に反論するために書かれました。ブラヴァツキー自身の手による神智学入門書です。

もまた嘲笑うのか？ 謎めいた新参者 (= 新年である 1890 年) よ、お前の未来の子となる 365 日（まさに「青ひげの秘密の部屋」）の扉を、ヤヌスが一つずつ開けていって初めて、諸国民はお前が「幸福な年」だったのか、それとも災厄の年だったのかを判断できるのだ。

* 数字のゼロは、それ単独で、いかなる数字にも先行されないとき、初めて無限の宇宙と絶対なる神性 (Deity) の象徴となる。

一方、すべての国民も、すべての読者も、もし未来の秘密を知りたいのであれば、それぞれの神々に問いかけるがよい。たとえば、アメリカ人はニコデモのように、今や星条旗のもとで繁栄している、生きていて実際に生まれ変わった三人のキリストのうちの一人――いずれも自らをイエスと名乗っている――のもとへ赴くことができる。スピリチュアリストは、お気に入りの霊媒師に自由に相談でき、その霊媒師は依頼人のためにサウルを呼び起こしたり、デボラの霊を呼び出したりするかもしれない。紳士的なスポーツマンは、ライバルの騎手の神秘的な住処を訪ねることもできるし、普通の政治家なら秘密警察やプロの手相占い師、占星術師などに相談するだろう。私たち自身について言えば、私たちは数字にのみ信頼を置き、そしてヤヌスの顔のうち「過去」と呼ばれる側だけを信じている。なぜなら――ヤヌス自身、未来を知っているのだろうか？ あるいは……「おそらく、彼自身も知らないのかもしれない」からである。

1888 年

［ルシファー誌　第 1 巻第 5 号　1888 年 1 月　337-338 ページ］

人々はたいてい、友人たちに「幸せな新年を」と願うものだが、時には「幸せ」に「繁栄」を加えて祈ることもある。しかし、1888 年という暗黒な数字のもとで真理のために生きる人々に、多くの幸福や繁栄が訪れるとは考えにくいだろう。それでもこの年は、まばゆいばかりに輝く金星＝ルシファーによって到来が告げられている。その輝きは、あまりに鮮やかで、より稀な存在であるベツレヘムの星と見間違われるほどである。この星もまた、もうすぐ私たちのもとに現れようとしている。こうした状況のもと、きっとクリストス（キリスト）の霊の何かが地上に生まれるに違いない。たとえ幸福や繁栄が欠けていたとしても、この新しい年には、それらを超える何か偉大なものを見出すことができる。金星ルシファーは私たちの雑誌の守護星であり、私たちはその加護のもとで世に出ることを選んだ。だからこそ、その高貴さに少しでも触れたいと願う。これは私たち一人ひとりにも可能なことだ。読者の皆さんに「幸せな新年」や「繁栄」を願うよりも、むしろ、今年の到来を告げるこの輝かしい先駆け（金星）にふさわしい一年となるよう祈りたい気持ちである。そしてそれは、勇気と決意を持つ人々によってこそ実現できる。ソローは、「人生の芸術家」とは、日々の色を変え、触れ合う人たちに美しさをもたらすことができる人だと指摘した。私たちはさらに、人生そのものを神聖なものに昇華させる達人（アデプト）――すなわち人生のマスターが存在すると主張する。私たちが生きるこの世界の雰囲気そのものに影響を与えるこの営みこそ、最も偉大な芸術ではないだろうか。その重要性は、すべての人が生きて呼吸するだけで、世界の精神的・道徳的な空気に影響を与え、周囲の人々の日々を彩っていることを思い出せば、すぐに理解できる。他者の思考や生き方を高めることに貢献しない人は、必然的に無関心によってそれを麻痺させるか、積極的に引きずり下ろすかのどちらかである。もしそうなれば、人生の芸術は死の科学へと変わり、私たちは黒魔術師の働き

を目の当たりにすることになるだろう。そして、誰も完全に無為でいることはできない。多くの劣悪な本や絵が生み出されてはいるが、誰もが下手な作品をわざわざ作ろうとするわけではない。もし皆がそうしたらどうなるか、想像してみよ！ しかし人生とはそういうものだ。誰もが生き、考え、語るのである。もし、ルシファーに共感する読者の皆さんが、人生を美しいだけでなく神聖なものにする術を学ぼうと努め、この奇跡の可能性を疑うことなく、今すぐこのヘラクレス的な課題に取り組むと誓ったなら、1888 年がどれほど不運な年であっても、輝く星にふさわしい幕開けとなることだろう。幸福や繁栄は、私たちのような未熟な人間にとって、必ずしも最良の友とは限らない。それらがもたらす平和は稀であり、平和こそが唯一永続する喜びである。平和というと、人生の終わりや宗教的な精神状態と結びつけて考えがちだが、そのような平和には多くの場合「期待」という要素が含まれている。すなわち、この世の楽しみを手放し、魂が来世の快楽を待ち望む、というものである。しかし、哲学的な心の平安はこれとは異なり、人生の早い段階で快楽をほとんど味わっていなくても、また十分に味わった後でも、到達することができる。アメリカの超越主義者たちは、人生は外的な状況や快楽・繁栄の助けがなくても、崇高なものになり得ることを発見した。もちろん、これは過去にも幾度となく発見されてきたことであり、エマーソンはエピクテトスが唱えた主張を再び取り上げただけである。しかし、誰もがこの事実を自分自身で新たに発見しなければならない。そして一度それを悟れば、自分の人生でその可能性を現実のものにしようと努めなければ惨めな存在であると気づくのである。ストア派が崇高だったのは、自分の絶対的な責任を認め、それを回避しようとしなかったからだ。超越主義者はさらに崇高だった。内なる未知の可能性を信じていたからである。オカルティストはその責任を十分に自覚し、自らの可能性を試し、その知識を得たことでその称号を主張する。真摯な神智学徒は、自らの責任を認識し、知識を求めつつ、知り得る限りの最高の基準に従って生きようと努める。『ルシファー』は、そうしたすべての人に挨拶を送る。人の人生は自らの手にあり、その運命も自分自身が決めるものである。ならば、1888 年がこれまでになく大きな霊的成長の年にならない理由があるだろうか。それを実現できるかどうかは、私たち自身にかかっている。これは宗教的な感傷ではなく、現実の事実である。ひまわり畑のすべての花が光に向かって咲くように、私たちもまた、光に向かって歩んでいくべきではないだろうか。

そして、新年の誕生に特別な意味を持たせることが単なる空想に過ぎないなどと、誰も思わないでほしい。地球は明確な周期をたどっており、人間もそれとともに歩んでいる。1 日が色づけられるように、1 年もまた色づけることができるのだ。地上のアストラル生命は、クリスマスからイースターの間に若々しく、力強くなる。この時期に願いを立てる者は、その願いを一貫して実現するためのさらなる力を得る

シークレット・ドクトリンⅡ 人間生成論 ⑫

著：H・P・ブラヴァツキー　　訳：星野未来

(先月号のつづき)

ミョルニルはこのラウンドにおいてその役目を果たした。そして、イダの野――第五ラウンドのための復活の野――に、至高の神々の子らが集い、彼らの中に父たちが再び現れた（すなわち、彼らの過去すべての転生における自我（エゴ）が蘇った)。彼らは過去と現在について語り、祖先の智慧と予言を思い起こしたが、それらはすべて成就していた。彼らの近くには、しかし彼らには見えぬまま、強大なる者――万物を統べ、互いに怒り合う者たちの間に平和をもたらし、世界を支配する永遠の法則を定める者――がいた。彼らは皆、その者がそこにいることを知り、その存在と力を感じていたが、その名を知らなかった。その命により、新たな大地が［宇宙の］水から現れた。イダの野の南には、彼はオードラングと呼ばれるもう一つの天を創り、さらに遠くにはウィドブレインとして知られる第三の天を創った。ギミルの洞窟の上には、黄金で覆われ太陽の下で輝く、驚くべき宮殿が建てられた。［これらは我々の連鎖における三つの漸次上昇する球体である。］そこで神々はかつてのように玉座につき、世界の回復とより良き時代を喜んだ。ギミルの高み［第七球体、最も高く清浄なるもの］から、彼らはリフ［およびリフトラシル、浄化された人類の来るべきアダムとイヴ］の幸福なる子孫を見下ろし、彼らにより高く昇るよう、知識と智慧、敬虔さと愛の行いにおいて、一歩一歩、一つの天から別の天へと昇り、ついには万物の父の家において神々と合一するにふさわしい者となるよう、しるしを送った。(224)

秘教的仏教、すなわち智慧の教義を知る者は、これまで不完全ながら概説されてきたその教えを通じて、上記に含まれる寓意を明確に理解するであろう。

そのより哲学的な意味は、読者がプロメテウス神話を慎重に考察することで、より深く理解されるだろう。この点については、後ほどヒンドゥー教のプラマンタの観点からさらに検討される。一部の東洋学者によって純粋に生理学的象徴へと貶（おとし）められ、地上の火のみに関連づけられた彼らの解釈は、キリスト教を含むすべての宗教への侮辱である。キリスト教最大の神秘さえも、こうして物質へと引きずり下ろされてしまうのだ。神聖なるプラマンタとアラニの「摩擦」は、このイメージのもとでは、ドイツの唯物論者たち――彼らより悪しき者はいない――の粗野な発想しか思い浮かばない。確かに、サンスクリット語を話す民族において神聖な幼子アグニ（ラテン語ではイグニス）は、祭儀の際にプラマンタとアラニ――すなわち卍（スヴァスティカ）――の結合から生まれる。しかし、それが何だというのか。トヴァシュトリ（ヴィシュヴァカルマン）は「神聖なる芸術家にして大工」(225) であり、ヴェーダにおいては神々および「創造の火」の父である。この象徴は極めて古く、また神聖であるため、古代都市の遺跡を発掘すればほとんど必ず発見される。シュリーマン博士は古代トロイの遺跡の下から、フサイオールと呼ばれるこのようなテラコッタ製の円盤を多数発見した。中心部に点のあるスヴァスティカの形と中央に点のある十字形の双方が大量に出土しており、その存在は古代トロイ人とその祖先が純粋なアーリア人であったことのさらなる証拠である。

(c) チャーヤは、既に説明した通り、アストラル・イメージである。サンスクリット文献ではこの意味を持つ。たとえば、太陽神スーリヤの妻であるサンニャー（霊的意識）は、修行生活を送るために森に退き、夫のもとには自身のチャーヤ（影または像）を残すと描かれている。

16. マヌシュヤ (226) はどのようにして生まれるのか。マインドを持つマヌはどのようにして作られるのか。(a) 父たち（227）は自らの火（228)、すなわち地中（地球の中）で燃える火を助けとして呼び寄せた。大地の霊は太陽の火（229）を助けとして呼び寄せた。これら三者（230）は共同の努力によって優れたルーパを生み出した。それ(231)は立つことも、歩くことも、走ることも、横たわることも、飛ぶこともできた。しかし、それはまだチャヤ、すなわち感覚を持たない影に過ぎなかった。(b) ...

ここで再び、秘教的経典に加えられた顕教的教えの光と助けを借りて説明が必要となる。マヌシュヤ（人間）とマヌは、ここではカルデアのアダムに相当するが、この語は、ユダヤ人のように最初の人間や一人の個人を意味するのではなく、カルデア人やアッシリア人のように人類全体を指すのである。注釈によれば、「隠された人」――すなわち微細な内なる人――の祖先となったのは、七つのディヤン・チョーハンのうち四つの階級であった。月のラハ、すなわち月の霊たちは、既に述べた通り、彼の形態――すなわち自然が彼に対して外的な働きを始めた際の模範――の祖先にすぎなかった。したがって、原初の人間は現れたとき、ただ無感覚なブータ（232)、すなわち「幻影」にすぎなかった。この「創造」は失敗であった。

(b) この試みも再び失敗に終わった。これは、物質的自然が自らの力だけで、完全な動物すら――ましてや人間を――創造しようとする虚しさを寓意している。父なる者たち、すなわち下位の天使たちはすべて自然霊であり、高位のエレメンタルもまた独自の知性を有している。しかし、それだけでは思考する人間を創造するには不十分であった。「生ける火」、すなわち人間の心 (マインド) に自己認識と自己意識――すなわちマナス――を与える火が必要とされた。そして、パールヴァカとシュチの子孫は動物電気と太陽の火であり、これらは動物を創造することができたが、最初の人間のアストラルな模型に与えられたのは、物理的な生命構造にすぎなかった。したがって、最初の創造者たちは原初の人間のピグマリオンであり、彼らはその像に生命を吹き込むことに失敗したのである――知性的 (インテレクチュアリー) に。

このスタンザは非常に示唆に富んでいる。人間における内在する原理――すなわち高次の自己（人間モナド）と動物モナド――の間にある謎を解明し、その隔たりを埋めるものである。両者は本質的に同一であるが、前者は神聖な知性を備え、後者は本能的な能力のみを有する。この違いはどのように説明されるのか、また人間における高次の自己の存在はいかに説明されるのか。

注釈はこう述べる。マハットの子らは人間という植物を活性化する者たちである。彼らは潜在する生命の乾いた土壌に降り注ぐ水であり、人間という動物を活気づける火花である。彼らは永遠なる霊的生命の主たちである……初め（第二人種において)、主たちのうちある者は自らの本質をマヌシュヤ（人間）に吹き込むだけであり、ある者は人間の中に住まいを取った。

これは、すべての人間が「神聖なる反逆者」の化身となったわけではなく、そのうちのごく少数だけがそうなったことを示している。残りの者たちは、投げ込まれた火花によって第五原理が単に活性化されたにすぎず、これが人間および人種間の知的能力の大きな違いを説明している。もし「マハットの子ら」が、比喩的に言えば、知的自由への衝動において中間界を飛び越えなかったならば、動物的人間はこの地球から上昇し、自らの努力によって究極の目標に到達することは決してできなかっただろう。循環的巡礼は、動物の場合のように、完全にではないにせよ、半ば無意識のうちに、存在のすべての次元を通じて遂行されなければならなかったはずである。純粋な霊の病的な不活動に対する知的生命のこの反逆のおかげで、私たちは今のように、自己意識を持ち、思考する人間となり、善にも悪にも神々の能力と属性を内に秘めているのである。ゆえに、反逆者たちは私たちの救済者である。このことを哲学者がよく熟考すれば、いくつもの謎が明らかになるだろう。対照の持つ引力によってのみ、二つの対極――霊と物質――は地上において結びつき、自己意識的な経験と苦悩の炎の中で精錬され、永遠において結ばれるのである。これによって、これまで理解されず、愚かにも「寓話」と呼ばれてきた多くの比喩の意味が明らかになるだろう。

まず、『ピマンダー』にある記述を説明する。それは、「天

の人」、すなわち「父の子」が、七人の統治者、すなわち物質世界の創造者かつ支配者の性質と本質を分かち合い、調和を覗き見て、［七つの］火の円環の力を突き破ることによって、下方へ向かう本性を示し、顕現させた、というものである。(233)

これは、ヘルメス主義の物語の各節を解説し、また、プロメテウスに関するギリシャの寓話も説明している。なかでも最も重要なのは、「天の戦争」に関する多くの寓話的記述、特にキリスト教教義における「堕天使」に関する『ヨハネの黙示録』の記述を解説している点である。さらに、最も古く、最も高位の天使たちの「反乱」と、彼らが天から地獄の深淵、すなわち物質界へと投げ落とされたことの意味を明らかにしている。それはまた、故ジョージ・スミスを通じてその驚きを表明しているアッシリア学者たちの近年の困惑さえも解決する。彼らは次のように述べている。「この部分［反乱について］に関して私が最初に考えたのは、悪の力との戦いが創造に先立っていたということだったが、今ではそれが堕落の記述の後に続くものだと考えている。」(234)

同書（235）において、ジョージ・スミス氏は、初期バビロニアの円筒印章から、聖なる樹、蛇、男と女の図版を掲載している。その樹には七本の枝があり、男の側に三本、女の側に四本ある。これらの枝は七つの根本人種を象徴しており、その第三根本人種の終わりに、性の分離と、いわゆる生成への「堕落」が起こった。最初の三つの人種は無性（性別を持たない）であり、次いで両性具有となり、残りの四つは互いに区別された男性と女性であった。著者は次のように述べている。「カルデアの創造神話において、人間を罪に導く竜は、海と混沌の生命原理であるティアマトの創造物であり、……それは世界創造時に神々に敵対していた存在である。」(236)

これは誤りである。竜は男性原理、すなわちファルス（男根）を擬人化した、あるいはむしろ動物化したものであり、ティアマトは「混沌の霊の具現」、すなわち深淵（アビス）の女性原理、子宮である。「混沌と無秩序の霊」とは、それがもたらした心（メンタル）的動揺を指す。それは、官能的で魅惑的かつ磁気的な原理であり、人を魅了し誘惑し、全世界を無秩序、混沌、罪へと陥れる、永遠に生きている活動的な要素（active element）である。蛇は女を誘惑するが、男を誘惑するのは女であり、両者ともカルマ的呪いに含まれる。ただし、それは生じた原因の自然な結果に過ぎない。ジョージ・スミスは次のように述べている：

竜が堕落の呪いに含まれていること、そして神々［エロヒム――粘土でできた人間が他のすべての動物と同様に今や創造主となるのを見て嫉妬した］――が、人類を苦しめるあらゆる災厄を人類の頭上に呼び寄せたことは明らかである。智慧と知識は彼（＝人間）を傷つけ、彼は家族間の争いに巻き込まれ、暴政に屈し、神々を怒らせるだろう……彼は欲望に失望し、無益な祈りを捧げ……将来の罪を犯すことになる。おそらくその後の行もこれらの主題を続けているだろうが、ここでも物語は途切れ、神々がティアマト（女）率いる邪悪な力との戦いに備える場面でようやく再開される。(237)

この記述は、一神教的な目的のために『創世記』では省かれている。しかし、カルデアの断片を『創世記』によって補おうとするのは、恐れや、教条的宗教およびその迷信への配慮から生じた、誤った方針であることは疑いない。むしろ、『創世記』こそが、それらの断片よりもはるかに新しいものである以上、前者（＝カルデアの断片）によって説明されるべきなのである。

□

息(238)は形態を必要とした。父たちがそれを与えた。息は物質の肉体を必要とした。大地がそれを形作った。息は生命の霊を必要とした。太陽のラハたちがそれをその形態に吹き込んだ。息はその身体の鏡を必要とした(239)。「我々はそれに我々自身のものを与えた！」とディヤーニたちは言った。息は欲望の乗り物を必要とした(240)。「それは持っている！」と水を抜く者は言った(241)。しかし、息は宇宙を抱く知性（マインド）を必要とした。「我々はそれを与えることはできない！」と父たちは言った。「私はそれを持ったことがない！」と大地の霊は言った。「私がそれを与えれば、その形は焼き尽くされてしまうだろう！」と大いなる火は言った(242)。……人間（243）は空虚で無感覚なブータとして残った……こうして、骨なき者たちは（244）、第三の時代に骨を持つ者となった人間たちに生命を与えた(245)。

完全な説明はスタンザ V の注釈に記されているため、ここでは簡単な説明にとどめる。原初の肉体を持つ人間、あるいはその身体の「父」は、太陽に宿る生命の電気的原理である。月はその「母」である。なぜなら、月には、植物や動物の成長と同様に、人間の妊娠や生殖を調節し、決定的な影響を及ぼす神秘的な力があるからだ。「風」またはエーテルは、この場合、二つの天体からこれらの影響を地上に運び拡散させる伝達の媒体を意味し、「乳母」と呼ばれる（246）。一方、「霊的な火」のみが人間を神聖で完全な存在とする。

では、その「霊的な火」とは何か。錬金術においては、一般的に水素を指す。一方、秘教的な実在においては、それはそのヌーメノン、すなわち「第一元素のディヤーン」から発する放射、あるいは光線である。水素は我々の地上の平面においてのみ気体である。しかし化学においても、水素は「我々の意味（用語法）における唯一の存在する物質の形態」であり（247）、我々のラヤムであるプロティルと非常に近い関係にある。それは空気と水の父であり生成者、あるいはむしろウパディ（基盤）であり、事実上「火、空気、水」である。すなわち三つの側面を持つ一つであり、ゆえに化学的・錬金術的な三位一体である。顕現の世界、すなわち物質において、それはヌーメナの領域にある主観的かつ純粋に霊的な実体的存在からの客観的象徴であり、物質的な流出である。ゴッドフリー・ヒギンズが水素をギリシャ人の「ト・オン」、すなわち「一者」と比較し、さらには同一視したのも当然である。彼が指摘するように、水素は水を生成するが水そのものではなく、火を顕現あるいは創造するが火そのものではなく、また空気でもない。ただし、空気は水と火の結合の産物と見なすこともできる。なぜなら、水素は大気中の水分要素に含まれているからである。それは三つが一つとなったものである。

比較神統記を研究すれば、これらの「火」の秘密が、あらゆる古代民族の秘儀、とりわけサモトラケの秘儀において教えられていたことが容易に分かる。カビリ――古代の神々、神人、偉大なる神々、そしてティタンの中で最も秘教的な存在――が、カルティケーヤ（彼自身もクマーラの一人である）を筆頭とするクマーラやルドラと同一であることに、少しの疑いもない。これは外面的にも明白であり、これらのヒンドゥー教の神々は、カビリと同様に、自然界の最も秘教的な力の具現化された聖なる火であった。アーリア人種の諸分派、すなわちアジア系とヨーロッパ系、ヒンドゥーとギリシャは、その真の性質、もし重要性でなくとも、それを隠すために最善を尽くした。クマーラの場合と同じく、カビリの数も定かではない。三人または四人だけだったと言う者もいれば、七人だったと言う者もいる。アクシエルス、アクシオセルサ、アクシオセルス、カスミルスは、四人のクマーラ――サナト・クマーラ、サナンダ、サナカ、サナタナ――の別の側面である可能性が高い。前者の神々は、その父がヴァルカンであるとされ、ディオスコリ、コリバンテス、アナクテス等と混同されることが多かった。同様に、父がブラフマー――あるいはむしろ「彼の怒りの炎」であり、それがブラフマーに第九の、すなわちカウマラ創造を行わせ、ルドラまたはニラローヒタ（シヴァ）とクマーラたちを生み出した――とされるクマーラたちも、アスラ、ルドラ、ピトリたちと混同された。その理由は単純で、それらはすべて一つ、すなわち相関する力と火だからである。ここでこれらの「火」とその真の意味を詳述する余地はないが、本書の残りが出版されることがあれば、その試みを行うかもしれない。それまでの間、さらにいくつかの説明を加えておく。

前述の事柄はすべて、言葉で説明するよりも、学徒自身の直観に委ねて解き明かされるべき謎である。もし火の秘密について何かを学びたいのであれば、錬金術師たちの特定の著作に目を向けるとよい。彼らはオカルティストと同様に、火をあらゆる元素と正確に結びつけている。読者は、古代の人々が宗教と自然科学を哲学と密接かつ不可分に結びつけて捉えていたことを忘れてはならない。アスクレピオスはアポロン――すなわち太陽、生命の火――の子であり、同時にヘリオス、ピュティオス、そして神託の叡智の神でもあった。顕教宗教においても秘教哲学においても、元素、特に火・水・空気は、私たちの五感の創始者とされ、したがって秘教的な意味で五感と直接結びつけられている。これらの物質的感覚は、プラーナ文献でプラティサルガ、すなわち「第二次創造」と呼ばれるものよりもさらに低次の創造に属する。「液状の火は無分別の火から生じる」と、ある秘教の格言は

述べている。

円は思考であり、直径［または線］は言葉であり、その結合が生命である。

カバラにおいて、バト・コルは神の声、すなわち原初の光であるシェキナーの娘である。プラーナ文献やヒンドゥー教の顕教においては、ヴァーチ（声）はブラフマーの女性的ロゴスであり、原初の光アディティの変容である。そして、もしユダヤ神秘主義においてバト・コルが天からの明瞭な超自然的な声であり、「選ばれし民」に神聖な伝統と律法を啓示するものとされるなら、それはヴァーチがユダヤ教以前に「ヴェーダの母」と呼ばれ、リシ（聖仙）たちに宿り、その啓示によって彼らを鼓舞したからに他ならない。ちょうどバト・コルがイスラエルの預言者やユダヤの大祭司たちを鼓舞したとされるように。そして両者は、それぞれの神聖な象徴体系の中で今日まで存在し続けている。なぜなら、古代の人々は音や言葉を、音を特徴とする空間のエーテルと結びつけていたからである。ゆえに、火・水・空気こそが原初の宇宙的三位一体なのである。

私は汝の思考、汝の神であり、湿の原理よりも古く、闇［カオス］の中に内より輝く光である。そして神(God) の輝く言葉［音］は、神性の子（the Son of the Deity）である。(248)

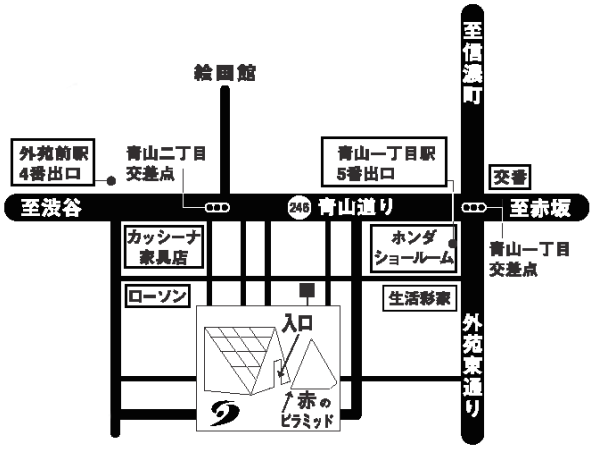
このように、我々は「一次創造」を十分に研究しなければ、「二次創造」を理解することはできない。最初の人種には三つの初源的な元素が含まれていたが、火はまだ存在しなかった。なぜなら、古代においては、人間の進化およびその霊的・肉体的感覚の成長と発達は、この地球の宇宙的次元における元素の進化に従属していたからである。すべてはプラバヴァーピヤーヤ、すなわち神々における創造的かつ感覚的原理の進化、さらにはいわゆる創造神自身の進化に由来する。これは、顕教の聖典においてヴィシュヌに与えられた名や呼称に見出される。オルフィックのプロトロゴスとして、彼は「プールヴァジャ」（前生成的）と呼ばれ、他の名は降順において彼をますます物質と結びつけている。

以下の並行した順序は、元素と感覚の進化、すなわち宇宙的・地上的「人」または「霊」と、死すべき肉体を持つ人間において見られる。

1. エーテル……聴覚……音。
2. 空気……触覚……音と触覚。
3. 火、または光……視覚……音、触覚、色。
4. 水……味覚……音、触覚、色、味覚。
5. 地……嗅覚……音、触覚、色、味覚、嗅覚。

BOOK CLUB KAI

スピリチュアルのブックショップ
www.bookclubkai.jp



INFORMATION
〒107-0062　東京都港区南青山 2-7-30　B1F
TEL：03-3403-6177　　FAX：03-3403-9849
OPEN　12:00~20:00　　定休日：なし
MAIL：info@bookclubkai.jp
半蔵門線、銀座線、大江戸線 “青山一丁目”5 番出口より徒歩 4 分
銀座線 “外苑前駅”4 番出口より徒歩 8 分

このように、各元素は自らの特性に加え、先行する元素の特性をも併せ持つ。各根本人種もまた、先行する人種を特徴づける感覚を加えていく。同様の原理が、人間の七段階の「創造」にも当てはまり、人は七つの段階を経て徐々に進化する。この点については後述する。

したがって、神々、すなわちディヤン・チョーハン（デーヴァ）は第一原因から生じるが――これはパラブラフマンではない。パラブラフマンは全原因であり、「第一原因」と称することはできない――この第一原因はブラーフマナの書においてジャガド・ヨニ、「世界の胎」と呼ばれる。一方、人類はコスモスにおけるこれら能動的な存在から流出する。しかし、第一人種および第二人種の時代において、人間は物理的存在ではなく、将来の人間の萌芽にすぎなかった。すなわち、ブーターディ（「起源」あるいは「元素が湧き出た原初の場所」）から生じたブータである。したがってヴィシュヌ・プラーナの注釈者が説明するように、彼らは他のすべてのものと共に、プラバヴァーピヤーヤ、「万物の起源であり、万物が帰結する場所」から生じたのである。そこから我々の物理的感覚も生じた。我々の哲学においては、最も高位の「創造された」神性そのものもそこから発する。宇宙と一体である彼は、ブラフマー、イーシュヴァラ、あるいはプルシャと呼ばれようとも、顕現した神であり、したがって「創造された」、すなわち限定され、条件付けられた存在である。これは、顕教の教えからも容易に証明できる。

「不可知なる永遠のブラフマン（中性または抽象）」と呼ばれた後、プンダリーカークシャ、「至高にして不滅の栄光」は、サダイカ・ルーパ、「不変」または「不動」の自然ではなく、エカーネカ・ルーパすなわち「単一にして多様」と称されるとき、彼、すなわち原因は自らの結果と融合する。そして、その名を秘教的な順序で並べると、以下のような降順の階梯となる：

- マハープルシャまたはパラマートマン：至高の霊。
- アートマンまたはプールヴァジャ（プロトロゴス）：自然の生ける霊。
- インドリヤートマンまたはフリシケーシャ：霊的または知的な魂（感覚と一体のもの）。
- ブータートマン：生ける魂、または生命の魂。
- クシェートラジュニャ：具現化された魂、または霊と物質の宇宙。
- ブランティダルシャナタ：誤った知覚――物質宇宙。

最後の名称は、誤った認識によって物質的な形態として知覚または概念化されたものを意味するが、実際には、我々の物理的宇宙に存在するすべてがそうであるように、単なるマーヤー（幻影）に過ぎない。

ディヤーン・チョーハンの本質の進化は、霊的世界と物質世界の双方におけるこのブラフマンの属性との厳密な類比に基づいて起こる。後者（＝ディヤーン・チョーハンの本質）の特性は、今度は人間全体、そして人間の各原理に反映される。それぞれの原理は、同じ漸進的な順序で、さまざまな「火」と元素の一部をその内に含んでいる。

【脚注】

224　同書、同箇所。

225 「聖なる火の父は」とジョリー教授は記す。「トゥヴァシュトリという名を帯びていた……その母はマーヤーであった。彼自身は、司祭が彼の頭上に霊的な（？）ソーマを注ぎ、その体に犠牲によって清められたバターを塗った後、アクタ（油注がれた者）と呼ばれた。」（『金属以前の人類』190 頁。）このフランスのダーウィニストは、情報源を明記していない。しかし、この一節を引用したのは、唯物論者たちにもようやく光が差し始めたことを示すためである。アダルベルト・キューンは、著書『火の起源』において、二つの記号［卍］と［中央に点のある卍］をアラニと同一視し、この名で呼んでいる。彼は次のように付け加えている。「火を起こすというこの過程は、自然と人間を有性生殖の観念へと導いた」など。このシンボルが、ある側面において人間の生殖と結びついているという点において、より高貴で、より秘教的な思想が人にこのシンボルを発明させた可能性はなかったのだろうか。しかし、その主要な象徴性は宇宙生成論に関わるものである。「アグニは、アクタ（油を注がれた者）の状態において、キリストを連想させる」と

ジョリー教授は述べている。「マーヤーは母マリア、トヴァシュトリは聖ヨセフ、すなわち聖書の大工である」。リグ・ヴェーダにおいて、ヴィシュヴァカルマンは神々の中で最も高位かつ最古の存在であり、彼らの「父」である。彼は「大工あるいは建築者」である。なぜなら、一神教徒でさえ神を「宇宙の建築家」と呼ぶからである。とはいえ、本来の概念は純粋に形而上学的なものであり、後のファリシズムとは何の関係もなかった。

226　真のマヌシュヤ（Manushya）。

227　バリシャド（Barishad）（？）。

228　カヴィヤヴァーハナ（Kavyavâhana）、電気の火。

229　シュチ（Shuchi）、太陽の霊。

230　ピトリ（Pitris）と二つの火。

231　形態。

232　なぜオリエンタリストたちがプラーナにおけるブータ（Bhûtas）を「悪霊」と訳したのかは明らかではない。ヴィシュヌ・プラーナ（I. v、ウィルソン訳、フィッツエドワード・ホール注、i. 83）のシュローカは単に「猿のような色をして肉食であるため恐ろしい悪鬼たち」と述べている。インドでは現在、この言葉は「幽霊」、すなわちエーテル的あるいはアストラル的な幻影を意味するが、秘教的教義においては、元素的な物質（エレメンタル・マター）、希薄で非複合的な本質から成る何か、具体的にはあらゆる人や動物のアストラル・ダブルを意味する。この場合、これらの原始人は、最初のエーテル的ディヤーニ（Dhyânîs）またはピトリ（Pitris）のダブルである。

233　『ピマンダー』エヴェラード訳、II 巻 17-29 参照。

234　『カルデアの創世記』92 頁。

235　91 頁。

236　同上、同箇所。

237　同上、同箇所。

238　人間のモナド。

239　アストラル・シャドウ。

240　カーマ・ルーパ。

241　シュチ、すなわち情熱と動物的本能の火。

242　太陽の火。

243　誕生しつつある人。

244　その後。

245　人種。

246　シュローカ 22 を参照。

247　W・クルックス著『元素の起源』21 頁参照。

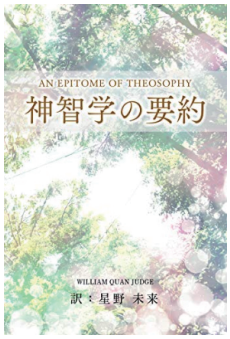
神智学の要約

著：W・Q・ジャッジ　訳：星野 未来

電子書籍 Kindle 版 450円

POD 版 880円

【本書について】
神智学協会の主要な人物の一人、W・Q・ジャッジによる "AN EPITOME OF THEOSOPHY" の日本語訳版です。ざっくりと神智学の教義の内容が述べられています。
巻末付録に「大宇宙とその創造的な３と７と１０の中心」（H･P･ブラヴァツキー）と、「アヴィチについて」（H･P･ブラヴァツキー その他）を載せました。概要でありながら奥深い一冊です。



新時代の共同体 1926 ⑦

アグニヨガ協会

93

旅の質について。

旅の仕方を学ぶ必要がある。家から離れるだけでなく、家という概念そのものを克服する必要がある。より正確に言えば、家の範囲を広げる必要がある。私たちがいるところが家だ。進化は、家という監獄の現象を覆す。意識の解放が成功すれば、移動は自由になることができる。偉業や苦難、高揚ではなく、意識の質が、慣れ親しんだ場所から私たちを引き離すのだ。慣れ親しんだ場所には、多くの煙と酸とほこりが溜まっている！ 我々は隠遁生活には反対だが、カビの生えた小さな家は、洞窟よりも悪い。思考に余地を与えることができる人々を呼び寄せよう。

多くの国境が国籍を消し去るとき、世界の表面を歩くあなたを見てみたい。小さな釘に釘付けにされて、どうやって飛べるのか？ 本当に考えてみると、人類にとって旅がいかに大切かが分かる。

94

あなたは既存の本の不完全さについてよく話す。さらに言うと、本に誤りがあるのは重大な犯罪に等しい。書籍に書かれた嘘は、重大な名誉毀損として訴追されなければならない。話し手の嘘は聞き手の人数に応じて罰せられる。作家の嘘は本の発行部数によって追及される。国民の書庫の地位を嘘で占拠することは重大な犯罪である。著者の間違いの質を評価するには、著者の真意を見抜かなければならない。無知は最悪の根拠となるだろう。恐怖と意地悪が最も近い場所を占めるだろう。これらすべての特徴は共同体では許されない。新しい社会を構築する上で、これらの特徴を排除する必要がある。禁止措置は、いつものように不適切だが、明らかな誤りは書籍から削除する必要がある。書籍の回収と再版の必要性が著者を反省させるだろう。すべての市民は間違いを証明する権利を持っている。もちろん、新しい見解や考え方を妨げることはできない。しかし、誤った情報が誤解を招いてはならない。なぜなら、知識は共同体の武具であり、知識の保護はすべてのメンバーに課せられた義務だからである。

1 年以内に書籍を点検しなければ、犠牲者が多くなるだろう。特に、その尊厳が損なわれている書籍は、慎重に保護しなければならない。書庫の棚には、嘘だらけの書籍が山積みになっている。このような寄生虫を保存することは許されない。悪いベッドで寝ろ、と言うことはできるが、嘘だらけの書籍を読むことを勧めるのは不可能だ。

なぜ炉床の一番いい場所を嘘つき道化師に変えてしまうのだろう。まさに、本は子供たちの意識を汚染している。本の問題について触れなければならない！

95

ある日、一人の女性が、祝福された仏陀とマイトレーヤの像の間で立ち止まり、どちらに敬意を表すべきか分からずにいた。すると、祝福された仏陀の像がこう言った。「私の教えに従い、未来を敬いなさい。過去を守りつつも、目を昇る朝日に向けなさい」。

我々がいかに未来のために働いているかを忘れるな。そして、あなたの全存在を未来へと向けなさい！ 光に背く教えも、知識の光のもとに運ぼう。なぜなら、この世の光は闇に覆われているからだ。

神智学協会日本ロッジ　勉強会のお知らせ

勉強会を毎月オンラインで行っております。会員の参加費は無料です。勉強会の日程はメールでお知らせしていますが、メールが届いていない会員の方はinfo@theosophy.jpまでご連絡ください。

神智学協会日本ロッジ　ご案内

神智学協会日本ロッジは、世界各地に支部を置き活動している神智学協会（The Theosophical Society）国際本部インド・アディヤールの日本支部です。神智学協会日本ロッジは、神智学協会の目的の遂行と神智学協会が提唱する神智学の教えの普及活動を行っています。

神智学協会の目的

⑴ 人種、信条、性別、階級、皮膚の色の相違にとらわれることなく、人類愛の中核となること。
⑵ 比較宗教、比較哲学、比較科学の研究を促進すること。
⑶ 未だ解明されない自然の法則と人間に潜在する能力を調査研究すること。

神智学協会の会員

⑴ 神智学協会日本ロッジの会員は、神智学協会国際本部の会員名簿に登録されます。
⑵ 神智学協会日本ロッジの会員制度は１年ごとの会費納入によって更新されます。
⑶ 神智学協会日本ロッジの会員は、会報誌『テオソフィア』の配布を受けます。

支援基金

神智学協会日本ロッジでは、神智学の教えを普及するために会の活動を支援することを目的として、支援基金を設立し皆様からの募金を募っております。ご支援いただける方は、下記口座にご入金ください。

【銀行振込によるご入金口座】
ゆうちょ銀行　〇〇八支店（ゼロゼロハチ）
口座番号：普通預金98936871
口座名義：神智学協会ニッポン・ロッジ

【他の金融機関からご入金する場合】
ゆうちょ銀行　〇〇八支店（ゼロゼロハチ）
口座番号：普通9893687
口座名義：神智学協会ニッポン・ロッジ

会報誌について

神智学協会日本ロッジの会報誌『テオソフィア』は３ヶ月ごと年４回発行されます。会報誌についてのお問い合わせは、メールにてお願いいたします。【Email】info@theosophy.jp　【編集部】岡本

© 神智学協会日本ロッジ　2025　Printed in Japan

THERE IS NO RELIGION HIGHER THAN TRUTH